

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第660号 平成25年12月16日

巨星墜つ

「巨星墜つ」という言葉は、この人にこそ相応しいと改めて思います。

12月5日、南アフリカ共和国の人種隔離政策「アパルトヘイト」と闘い続け、ノーベル平和賞を受賞した「ネルソン・マンデラ」氏が逝去されました。享年95歳でした。

このマンデラ氏の死に対して、南アフリカ共和国のズマ大統領は「世界で愛と和解、正義の象徴だった。国を再建するために憎悪や怒りを克服できることを我々に教えてくれた」と述べ（12月7日付朝日新聞）、哀悼の意を示しています。

また、世界各国の首脳からも、マンデラ氏の死を悼む声が寄せられています。

アメリカのオバマ大統領は「最も大きな影響力と勇気を持ち、深い善性を備えた人物を失った」、オーストラリアのアボット首相は「ネルソン・マンデラは政治的だけでなく、精神的な指導者として永遠に記憶されるだろう」と、それぞれコメントしています（12月6日付朝日新聞）。また、日本の安倍首相も「アパルトヘイト撤廃のため強い意志を持って闘い抜き、国民和解を中心に大きな成果を上げた偉大な指導者だった」と述べています（12月6日付朝日新聞）。

こうした世界の首脳たちの言葉からも、民族和解、国民共生に心血を注いだマンデラ氏の功績が如何に大きいかが、良く分かります。

マンデラ氏は、1918年南アフリカ南東部のトランスカイ地方に生まれました。

大学卒業後は金鉱山で働きながら法律を学び、1952年に弁護士事務所を開設、また、反アパルトヘイト運動にも従事します。

1962年逮捕され、2年後には「反逆罪」で終身刑を宣告されますが、マンデラ氏は獄中からも黒人解放を訴え続け、世界中から「不屈の闘士」として尊敬を集めました。

1989年、マンデラ氏は当時のデクラーク大統領と会談し、その翌年に釈放され、27年にも及ぶ獄中生活から解放されます。

1993年、マンデラ氏はデクラーク大統領と共にノーベル平和賞を受賞。その翌年、全ての人種が参加した初めての国政選挙で大統領に選ばれます。

マンデラ氏は、アパルトヘイトが撤廃され、南アフリカ共和国初の黒人大統領に就いた後も、黒人が白人に報復することを許さなかったといひます。それは、彼が

「白人の支配とも、黒人の支配とも闘って来た（1964年の反逆罪裁判の中での氏の発言）」からであり、「全ての人々が、調和と平等な機会の下に暮らす事」が彼の行動を支える揺るがぬ理念だったので。

マンデラ氏が大統領として目指した国は、全人種が復讐心や恨みを乗り越えて融和した「虹の国」でした。

支配されて来た人々が権力を握った時、それまでの支配階級に対して報復するというのは何処にでもある事で、歴史はそうした事の繰り返しであったと思います。だからこそ、マンデラ氏が自ら楯となって民族の和解を推し進め、実現した事は奇跡に近いと思います。そして、それを可能としたのは、マンデラ氏自身が示した「大いなる許しの心」だったのではないかと思います。武装闘争の契機となったシャープビル事件で警察官に撃たれて左目の視力を失った元女性闘志は「マンデラが許したから私も憎まない」と話したという逸話（12月6日付朝日新聞から）は、その事を良く物語っています。

マンデラ氏は、世界の人々に、国家としての崇高な生き方を示した偉大なリーダーでした。しかし、現実の世界はどうでしょうか。依然として、世界各地で互いの正義がぶつかり合い、不信や怨念、怒りが増幅され、紛争は止まず、多くの人々の血が流され続けています。自分達の利益だけを考える、自分達の正義以外の存在を認めない、そうした不寛容で、攻撃的な社会のままでは、信頼と和解に基づく新しい世界を創る事は困難というしかありません。

こうした「負の連鎖」を断ち切る事が出来るとすれば、それはマンデラ氏が示した「大いなる許しの心」だと私は思います。国と国、民族と民族との間では、それは極めて難しい事の様に思われます。相手に寛容な態度を取れば、弱腰と受け止められ、隙をついて攻撃されかねない、そうした不安や不信が新たな「負の連鎖」を引き起こします。しかし、そんな泥沼の様な負の連鎖も、断ち切ることが不可能ではない事をマンデラ氏は示してくれたのだと思います。（塾頭：吉田 洋一）